

人として、この記録を「私の戦争と平和」の断片として、多くの人々に語り伝えたい思いでいっぱいである。そして今ひとつ、中国残留孤児の方々の肉親捜しの叫びを新聞やTVで目の当たりにしたとき、「さあ！ もう一度言っごらん……」と私に命じた「あのとときの父の言葉」の意図していたものが、今更のように理解されて、父の声なき声が私の胸によみがえってくるのである。

さっば、雄基よ！

東京都 大嶋 幸雄

一 子供は親を選べない

私の父、高久三雄は栃木県の農家の次男で、志を立てて十六歳で平安北道で旅人宿経営の知人を頼って朝鮮に渡ったが、そこで大正七（一九一八）年徴兵となり、羅南歩兵第七十六連隊へ入営。同十五年に小沼ヒサと見合い結婚した。

明治三十四（一九〇一）年生まれの母ヒサは、宇都宮女子師範を出て小学校教員をしていたが、行く末の苦勞を知る由もなく渡鮮、新居は営外居住の陸軍官舎で、長女、次いで長男が誕生した。

昭和二（一九二七）年に曹長で除隊しその後雄基に移住。面事務所（村役場）書記から鉱山師に転職し雄基・羅津の開港前後に土地投機で儲け、成金というところまではいかないにしても、生涯で最良の日々を送り、事業家相手の金融業を副業にした。

当時では子だくさんは珍しくなく、上から二歳ずつの差で、昭和元年生まれの正子、次いで昭和、時子、和雄、昭和八年生まれの私こと幸雄、日出雄に末は昭和十二年生まれの安雄と、出来はともかく、七人の子が揃った。父は「まさに昭和のとき、幸いの日は安からん」と、こんな文句をこしらえ得意になっていた。しかし日出雄は、数え年五歳で病死してしまった。

昭和十三年夏、近くで張鼓峰事件が起きた。ソ

連軍の十六機編隊が空から越境してきた。当時六歳の私は部屋に引き籠もっていて見られなかった。示威飛行だったと思う。夜は砲声が千発余りも聞こえて眠れなかった。国境第二線となる雄基は危ない所であったが、一般の日本人は近い将来に不安を抱く者はいなかった。無敵皇軍を信頼しきっていたからである。

二 つらい小国民

記憶では家族揃っての行楽はなく、父は留守勝ちだった。長姉は羅南高女の、長兄は羅南中学の各寄宿生で、夏休み冬休みに帰省すると家の中は急に賑やかになり楽しかった。

昭和十六年暮れの大東亜戦争開戦、これがすべてを悪くした。大和ホテル隣にいた小料理屋の主人が昭和十七年正月に我が家に来て、「この戦は大負けですわ」と言ったが、世間は開戦以来の大戦果に沸いていたところで父は白けた顔をしていた。「配給制なんかしくさって、国民に十分な飯も食わさんようでは勝てますかい」とこぼしてい

た。行列しても豆腐はおろか、卵の花でさえ買えなかった。衣料品から木炭まで切符制になり商人が威張りだした。米の配給が最もこたえた。

小学校が国民学校になり世の中はだんだんとかしくなった。学年別に多様な勤労奉仕が増え通学班の編成、男子教員による不公平な体罰強化などがあった。普通学校の朝鮮人児童が、内地人児童を集団で襲ったこともあった。ただの子供の喧嘩ではなく、民族的な反日闘争だった。我が方は団結心を欠き各個撃破された。仲裁が入ってもしばらくすると再び始まり十年闘争の様相を呈していた。家に帰れば曹長殿にささいなことで折檻されて、私に安息の場はなかった。

戦後ある引揚者の会で四十歳くらいの会員子女と話をしたことがあったが、朝鮮人児童たちにやられた話になると「うそお！日本人が朝鮮人を虐めたんでしょ。植民地でそんなことあるのかしら」と、不思議がっていたが、それは事実であった。

勤勞奉仕は、松根油掘りだけではなくいろいろあった。供出割当のノルマには困った。軍馬の飼料はまだしものこと、ガマの穂、キキョウの根などを幾ら幾ら取って来いと言われても、成果は限りなく零に近かった。どこにでもある物ではなく町の子供にとってこいというのは無理な話であって、無茶好きの先生でも割り当てるだけで追求はしなかった。

三 港と空襲

雄基は、昭和十二年に開港したが、その直後に羅津が開港したので雄基は寂れてきたが、昭和十九年春、濃霧の雄基港にねずみ色の輸送船団が入港してきた。食糧難の内地本土へ、満州で生産した穀物を急送するためであった。しかしこのことは新聞記事には載らなかった。荷役が間に合わずに、学生や隣組の人々も総動員されて勤勞奉仕に行った。埠頭に山積みされた穀物の山は膨大な量であった。我々は昼夜兼行で作業してふらふらになり、海防艦乗員の目は、見張り警戒で血走って

いたが、私は初めて決死の表情というものを見た。

敵潜に雷撃されて、船尾から沈み始めた戦艦標船が、必死で港にたどり着いたが、港で見ている人々の歓声が上がらなから、短艇二隻で総員退去となり、ようやく着岸したところに本船は徐々に沈み、やがて完全に沈没してしまった。

終戦直前の八月九日の朝、西海岸にいたらソ連軍の戦爆連合十二機に不意打ちをくった。埠頭にいた何千人もの苦力隊（満州から応援に来た中国人労働者で愛国勤勞隊といった）が、大声をあげながら逃げ惑っていたが、その群集をめがけて爆弾が炸裂した。阿鼻叫喚とはまさにこのことだった。やがて空襲警報が解除されて帰宅の途中では、消火活動中の警防団にとび口で追い払われた。ここでは、「非常のときは味方も敵」という予想外の教訓を得た。

末弟の小学校二年生だった安雄は、五月に左足を骨折していたので、空襲時に迅速な退避などが

できず、白鶴洞の孫氏という農家へ疎開することになった。古い乳母車に荷物を積み、その上に弟を寝かせて私が引き、母が後押しをして行った。父は家財道具を積んだ荷馬車の御者で、馬がよそ見をするとすかさず鞭で叩いていた。

郊外の変電所にさしかかったとき、爆音が響き第二波が来襲したが、その数がまたすごかった。百機は軽く超していて、夏空が覆われたようで私は肝をつぶした。雄基上空を大旋回しながらまさに壮大なデモンストレーションを楽しむような様子であり、これでは日本はとも敵わないと思っただ。主戦場でもない朝鮮の片田舎町で余裕のある所を見せつけたのだろう。

孫氏宅で夕焼けを見ていたが、いつまで経っても空半分が赤い。はっと気がついたが、それはここから南へ約十六キロメートルぐらい離れている羅津府が、空襲で炎上している火明かりであった。見物に集まった農民が、「アイゴーナジンゼンソムニダ（ああ、羅津は全焼した）」と泣きな

がら言っていた。

四 避難、あわや集団自決

八月十日も、朝から暑かった。防空監視隊へ出勤した父が慌てて帰って来て、「ソ連軍の地上部隊がロクヤに向かって攻めて来る。退避命令が出た！」と息をつまらせながら言っていた。ロクヤとは麓野面のことである。張鼓峰のときとは、全く事態が違うと思った。尻に火が付き、身支度、荷造りをした。孫氏の老爺に、「牛車で行け」と言われて出発した。国道に出ると膨大な煙が地表を這い、ひたひたと押し寄せてきて東方の町は全く見えなかった。

煙に追われて西へ向かったが、途中まで来ると日本人と朝鮮人の避難民の大渋滞にぶつかった。これ程の人数は見たことがない。父の同郷人で、満鉄雄尚駅の工夫長の一家と会々と、「もう来るころと思いついていた！」と言う。何しろ工夫長一家は子だくさんで、子供たちを次々と牛車に乗せると、炎天下の登山道で重荷にあえぎ歩いてい

た避難民が、わっとばかりに牛車に駆け寄って来て、後押しをしている私を突きとばして持っている荷物投げ込み始めた。子供たちは悲鳴をあげていた。牛車はその場に止まってしまった。父は、路傍のアカザを引き抜きそれを振るって群がる者を打ち払い、投げ込まれた荷を引き落とし。こんなことを繰り返しつつ標高千二百メートルの独山堡^{トウザホ}に着いて、あつと思つた。「見よ！雄基が燃えているではないか」、何本もの巨大な黒煙は海風でうねり、交差しあつて空高くあがり、ものすごい様子だった。ふもとの鉄柱洞へ降りアカシア並木を西へ行くが、広くもない道を大勢が行くからもたはしておれない。赤い夕日と土埃で黄色い霧が立ちこめる中を、すたすたとばたなどの足音が交差し響き、その音たるやすさまじいものがあった。トラック、牛車が混じり、一大奔流となつて流れているようだった。

鉱山師の父は、避難民に見付けられない林業組合倉庫へ向かい、「麓野面はもう無理だ。今日は

ここに泊まろう」と言つた。ここには出荷用の木炭が幾らでもあり、火山のように火をおこして、昼食兼夕食をむさぼるように食べた。「もしもだ、敵が来たら子供たちを始末して、重ちゃん（工夫長のこと）！二人で突撃しよう」と言つたが、敵よりも父の方が物騒だった。こういうときに限つて具合の悪いことが起きるものだ。「キュルル、キャラキャラ」と鋼鉄のきしる音がしてきた。「きたようだな？」「何だろう？」「敵の戦車だ」と思つた。

父はジャックナイフの刃を起こし、火を消した。「待つてくれ。ちょっと見て来るから。すぐに戻るからよ！」と言つて、工夫長はドラ猫のように闇に消えた。私は日ごろから速断傾向にある父を信用せず、一人で逃げる決心をしていた。暗い中で母と弟と顔を見合つて、「これが今生の見納めか」と断腸の思いであつた。キャラピラの音に、ディーゼルエンジンの音が加わつて迫ってきた。虫の音が止んだと思つたら工夫長が戻つて来

た。「味方だ！ あれはよ、牽引車がさ、兵隊を乗せたトラックを引っ張ってる」との言葉に、父は「そうかナナイチ（七十一連隊）だな」と、ぼつりと言った。

五 敗戦を知る

新站到着いたら、ここで停戦協定のうわさがあり、しばらく様子を見ることにして、歩け歩けはお休みとなった。背の高い憲兵が、「皆！ 元気をだせい。皇軍は十五日浦塩に敵前上陸したぞ！」と触れ回っていたがすぐにデマと分かった。言っている本人が白けているのだった。知り合いの崔氏の紹介で、旅人宿に泊まることができず大助かりだった。翌早朝に父に起こされて、次兄と三人で東の丘へ馬鈴薯ポテトを掘りに行った。このころになると冷えてきて吐く息も白く、露に濡れた足が寒くてたまらない。収穫作業中に兄が、「誰か来る」と言い「伏せろ」とも言った。熊みたいな男がゆっくり登って来た。よく見ると、会寧で別れた雄基本町の栗山果物店の主人だった。

袋を引きずり、にじり寄ると「高久さん！ 日本は八月十五日に連合国に無条件降伏しました！」と言ったが、父は、「えっ！ 停戦協定と聞きましたが？」すると栗山さんは「それは甘い。世界中を相手に戦って袋叩きにされたんですよ。兵隊が丸腰で逃げてるの見たでしょうが？」「ウーン」とうなつたまま、父は栗山さんをにらみつけた。私たち兄弟はへたり込んでしまった。朝霧が晴れて、今越えてきた山々に朝日が射して変わっていく光と影の素晴らしさに、我が日本の降伏を知ったこの歴史的瞬間において、高台から見た壮大な景観を私は忘れることができない。あとで調べると八月二十二日のことであった。

旅人宿に帰って芋を食べた。北隣にあった広場が騒々しくなっていたので、何かと見に行っていた。日本兵が、今でいうバーベキューをしていた。汚いトタンを並べ、燃える物は何でもと牛糞までくべて煙が立ち込めている。食べられる物は何でもトタンにのっけ、早く焼けるとガンガン叩

いて騒いでいた。そのうちに一人がハーモニカを吹き始めた。夜になるとキャンプファイヤーになった。大勢が手を叩いて、軍歌ではなくざれ唄を歌っていた。父が「派手にやってるな」と言うのと、清津から来た田中さんが「あれは新兵ばかりだね。指揮官がおらんのですよ。停戦祝いをやるんでしょ。兵隊というよりは青年団みたいですよな！」と、高笑いをしていた。

六 白岩の風が寒い

超満員の避難列車に乗って八月二十五日に白岩駅に到着した。標高千四百メートル。高原の風がうすら寒い。現住民がいるので畑を漁れないで、大勢の日本人避難民がうろろろしていた。マグネサイトの採鉱所があるので、ここの井戸水は悪く、私も腹をこわしてひどい目に遭った。東の外れで賑やかな団体と出会ったが、それは阿吾地人石附属病院の一団でそこで次姉時子と偶然に再会した。「あれ、時ちゃん！」と母が見付けた。「わあ！ お母ちゃん」と抱きついて来た。「それ

見ろ！ だから臨川で一緒に来いと言ったんだよ」と父がわめくと、姉はぷつと膨れて「私は病院班と興南へ行く！」と言いつ出したが、引率者の医師と両親の三人がかりで姉を説得し、合流することを波々承知したが、看護婦仲間と手を取り合って別れを惜しんでいた光景は忘れられない。

同じ会社の養成工中隊から次兄が合流したときも、僚友がついて来て泣かされた。「離合集散世の習い」、「会うは別れの始め」と言うが、そこには悲喜交々のものがあつた。私の同級生たちとも、八十パーセントは避難開始以来会うことがなかつた。

国道沿いに使われていない牛小屋があつたので、母屋に断つてここを宿舍にした。母屋から屋内禁煙を申し渡された父が、田中氏にもらつた防暑帽をあみだにかぶり電柱に片手をついてたばこを吸っていると、日本人の母娘がきて、「ヨボ、ヨボ。お豆腐頂戴。お・と・う・ふ。分かる？」と言つた。父は「お前らあ、何言ってるんだ。同

じ避難民じゃないか?」「あら、お話できるのねえ」と言つて父を馬鹿にしたようにして笑つていた。自分のしゃべっている言葉遣いの下品さが、全然分かつていなかった。父は、嘆きながら吐き捨てるように「日本人にはときどきああいう馬鹿がいるんだよ」と言つた。私たちは「ヨボ」という言葉を禁句にしていた。蔑称だからだ。

翌二十六日朝、連絡があつて「日本人は山に登れ」と指示された。目の前にある頭流山は丸はげの三角山だった。頂上に継ぎはぎの大テントが設営され、二千人はいたと思う。府邑別に居場所を決められた。

私は下痢腹痛が治らなくて参つた。仮設便所はいつも行列するほどの満員で、とてもではないが生理要求には間に合わない。野ぐそ厳禁だが、待たなして鉱石運搬用の鉄柱に隠れて呻吟しんげんを繰り返して、みるみるうちに体力が落ちた。姉が持っている救急袋にも正露丸はなく、そのうちに耳鳴りがしてきた。もう死ぬかも知れないと覚

悟を決め、さすがにしんみりしてきた。このころ、同級生の福留君が同じ症状で死亡していた。

駅で米の配給があると聞いて、私と次兄でもらに行けと言われて、死ぬはずの私も粥食べたさに二人で山を下り、操車場を見て足がすくんだ。わらび色の軍服を着たソ連軍が一個師団ぐらいいて、わいわいがやがやしゃべる声如山間に響いていた。耳鳴りの原因はこれであつた。恐ろしいのを我慢して、軍勢の隙間をくぐり抜け構内を探し回つた。マツチ箱みたいな建物に三人の日本人がいて、二升ほどの米をくれた。彼らもソ連兵のただ中にいるので、顔は土色になつていた。代金は要らないと、首を横に振つていた。

ソ連兵は、丸腰が多く装具は何も持っていない。男女兵士が肩を組み、いちゃついていて作業も整列もしない。こんな軍隊に「グニコちゃん(両手をあげて降参すること)」したのが不思議でたまらなかつた。

八月二十七日、本町で写真屋をしていた辻氏が

日本人会の伝達事項を伝える役になり、「雄基の皆さん！」と特徴のある口回しで話し始めた。

「ほら、辻放送が始まった」とみんなは茶化していたが、テント解散の話が出て、まじめに聞くようになった。今後の方針として、一、南下して感興へ行く。二、雄基に帰る。三、平壤（ピョンヤン）か南満へ行く。という話になったが、話半ばにテントがばさりと崩され、山上は騒然となった。

父は、「雄基へ帰ろう」と言い出したので、私は満足した。南下組は、早くも団列を作り下山を開始した。「辻氏が、北上組を引率するそうだ」とのことになったが、その辻氏は集まった人々を見回して、「じゃ、出発しますか!」と、おずおずと言った。辻氏が先頭に立つと、みんなは針に従う糸のように列を作って歩き出した。

水も飲まない絶食療法で私の腹具合も治まり始め、弟も歩けるようになった。前には雄基から白岩まで十五日かかったので、復路もそのくらいか

かるだろうと一応考えたが、今度は「亡国流民の旅」である。これからどうなるのかは誰にも分からない。

国道に降りると、南下組の行列に会った。遙か雄基の方向の空には、天候が回復したらしく白雲がわいていた。こうなれば一日も早く帰ろうと、病後の体を自分で励ましながら歩いた。

北上組は五百人くらい、南下組は千五百人くらいか。テントに入らず別に南下した団体や個人も、何倍もいたのではないかと思う。

七 道中双六あと戻り

つい先日の二十三日、二十四日と二日をかけて登って来たばかりの白岩駅である。このときは、機関車が石炭ではなく薪を焚いていたので山を登り切れず、エンコする度に避難民が列車を押すという珍道中であった。今度は下りだからそんなことはせずに済みそうである。駅でしばらく待って乗車許可が出た。もちろん切符など必要ななかった。今度私たちが乗ったのは、長い貨客列車の有

蓋車だった。夕方には茂山駅に到着した。

映画館に一泊。辻団長が舞台から「皆さん！清津に内地行きの船が待っています。これはひとえに赤軍のご厚意であります」と話をする、すぐにわあっという歓声と拍手がさらに大きく、当館で上映されたどんな名画のときよりも盛大であったと思う。ところが、これはまったくの真ッ赤な嘘であると分かった。山のテントで衛戍司令官の言ったことが、雄基に着いてすぐに嘘と知り落胆した。

翌二十八日早朝、朝鮮保安隊による厳しい検問があり、所持品検査を受けた。その後、茂山発清津行きの貨物列車に乗ったが、深い箱の無蓋車にすし詰めにされひどいことになった。天日に焼かれ、風は入らず、水筒はたちまちのうちに空になり、途中駅に停車しても水汲み行列が延々と続き、停車時間内ではとてもありつけなかった。夕方やっと清津に着く。下車して言われた「解散」という言葉の意味を体で知った。日没と共に急に

涼しくなった。駅前広場は爆撃跡の穴だらけで、とても暗い所では歩けない。次兄と駅舎に泊まろうと相談し、飛び込んだら爆撃の跡がすごい。外壁が壊れていなかったの、騙されたのだ。

二十九日早朝、次兄と近くへ食糧探しに行ったが成果はなかった。日本軍とそっくりの服装をした保安隊に、長時間の検問と検査を受けた。長居は無用とばかりに清津を出発した。雄基まで約百二十キロメートルの旅が始まった。

八 東海岸道中での見聞

この約百二十キロメートルの旅の中でもいろいろなことがあった。これを箇条書きにまとめる、次のとおりである。

- ・ 清津郊外の変電所を見て、もう雄基に着いたと錯覚した者たちがいた。
- ・ 同じく郊外で、日本軍の装備を捕獲しにトラックに乗って来た雄基保安隊と出会い尋問された。

・ 府境でジープに乗った三人のソ連兵が、団列

から二人の女性を拉致したが、清津保安隊が無事連れ戻してくれた。

・団列から中学生が二人失踪し、その後の消息がなくなった。

・某部落が戦火で全焼していた。

・団列後尾で老婆が頓死し、松林に埋葬した。

・捕虜になった陸軍の一個中隊と山中で出会った。団列を内地帰還と思い尋ねてきた。

・富居部落で一杯食わされた。「学校に泊まれる。この峯のすぐ裏にある」と言われ、行ってみたら暗い山だけだった。

・陸軍の放棄車両から手旗を拾い、赤旗を竿につけて先頭の者が持って目印にした。

・連津では一人一人に塩をしたホッケの干物を一尾ずつ配給して、公会堂に泊めてくれた。

・広い河原の橋が爆破されていて渡れなかった。

・日本兵の死体の一部が散乱していたので、埋葬した。八月十五日にここで陸軍の工兵隊が

全滅したそうだ。

・水坪では地主が全員に馬鈴薯、塩鯖を配給してくれて、この辺の状況を教えてくれた。

・梨津（芳津）海軍防備隊跡に一泊した。広い施設に人影なく略奪の痕跡が目立った。

・洛山の漁村に住んでいた日本人漁師兄弟が、沿道の自宅に落ち着いているのを見て、列中の者がうらやんだ。

・羅津の埠頭で、大型商船が丸焼けになっていた。ここではハエの大群にたかられて窒息しそうになった。

・羅津保安隊は全員に乾パン一袋と落花生二合を配給し、開拓会館に泊めてくれた。翌日降雨のためさらに一泊した。道中で最高の宿所だった。

・寛容洞の広大な軍馬補充部を通ったが、人馬共に姿が見えなかった。

八月二十九日清津を出て、九月九日羅津到着。足かけ十二日もかかった。一日に十キロメートル

くらいしか歩いていないが、老幼婦女が多く食べ物もなく、致し方なかった。

避難往路もそうであったが、復路の東海岸で無人になった施設、家屋の中は足の踏み場もないくらいに脱糞がしてあつて宿泊、休憩はできなかった。非常時にはこうなるものかと考えた。畑の作物を失敬したことはやむを得なかった。

九 「雄基良いところ誰言うた、後ろはげ山。前は海」

九月十一日羅津を出発し雄基に向かった。いたるところに略奪の痕跡があつたが、緑の並木が素晴らしかった。

雄羅峠を越えると雄基の町が遠望できた。競馬場脇から赤旗先頭に、元町小路を通り町に入る。我々避難民を見ようと集まつた朝鮮人の視線が、顔を突き刺した。到着した所は、我が家の斜め前の華僑小学校の校庭だった。よく見ると我が家は無事だったが、誰か占拠して赤旗が立ててある。覗いてみたい気持ちにはやつたが、銃剣を構えた

保安隊が通してくれない。温突オンドルの煙突からモヤモヤと出る煙を、母と弟が見つめ続けていた。父、姉と兄はちらつと見て、そのままそっぽを向いていた。

大通り向かいの満林ビルが保安隊本部になっていて、出頭した団長たちはなかなか出てこない。隣の邑事務所（町役場）ビルに赤旗が林立し、スターリンと金日成の巨大な肖像画が垂れ下がっていた。これを仰いでは打ちのめされた気持ちになり、振り向けば取られた我が家が目に入る。まさに悪夢を見ているような情けない気持ちになった。この日は、取りあえず金田材木店とみやこ旅館に分宿することになって、我が家は旅館組になった。翌十二日の朝「これからどうなる」という答えはすぐにきた。「連隊跡へ行け」郊外白鶴洞の廢墟に隔離追放であり、元の住居へは戻れないことがはっきりした。去る八月十二日の避難開始から一カ月、同じ十二日、同じ道を同時刻に避難しているような気がした。元羅津野戦砲兵連隊

(第七十一部隊)は自爆し、病舎と砲廠だけが残っていた。保安隊と話した団長は号令台に立つと、「雄基の皆さん！我々は苦しい避難の旅から懐かしい雄基に帰って来ました。しかし朝鮮当局は我々をこんな所に押し込めました。百メートル圏外に出たら銃殺すると言っています。皆さん！これが同じ邑民に対する仕打ちであります。この非人道的なやり方に対し、我々は絶対承服できません。しかし日本は敗れ、朝鮮は独立しました。この厳しい現実到我々は耐えていかなければならないのでしょうか。我々は……」と、絶叫した。並んで我々を監視する保安隊員たちは、ついひと月前までは軍人勅諭を唱えていた青訓の連中であつた。聴衆は息を飲んで声一つなかつた。

全員を病舎組と砲廠組に分けて解散、一斉に病舎と砲廠の間を這い回り探し物を始めた。まず燃料になるものを確保しないと、羅津で拾った大豆をいれることもできない。ゴミ、草、どんな小さい

物でもカルタ取りみたいに争って拾つた。飲料水は病舎渡り廊下に手押しポンプがあり、長蛇の列ができた。父は良い方法を発見して私に命令した。「お前はいつも行列に立っておれ」、そして次姉と次兄を伴い医務室の焼け跡を漁り、グチャグチャに焦げたブドウ糖のゼリーを拾って、「ちびちび食え」と言つて渡してくれた。それは苦くて妙な味がした。

どこまでが百メートル圏内なのか。燃料に窮した人々は保安隊の目を盗み、焼けた兵舎の炭化した材木を運び込んだ。百坪ほどの空き地を囲む板塀があつた。「構うもんか」と、バリバリはぎ取つた板塀は絶好の燃料になった。ここが何なのか後年分かつた。九六式十五加農砲の秘密操練場であつた。昭和十九年に内地防衛用に抽出され、ソ連参戦時は留守部隊だけだつたという。ちなみに現在これと同じ大砲が、靖国神社に奉納、展示されている。

砲廠は北向きで日が射さないからコンクリート

床は体が冷えて痛くなる。三日目に病舎へ逃げ込んだ。ホール、廊下などに収容され、木造床の有り難さが身にしてみた。ここで乳幼児がことごとく死に、軒下にズラリと埋められた。男たちはソ連軍の使役に駆り出され、へとへとになった。毎晩、朝鮮人が呼び出しをかけ鉄拳制裁をやる。戦時中の私怨を晴らしたわけで、父も徴用問題がたたって殴られた。主だった人は留置場送りになって後日釈放されたが、朝鮮人同房者からは差し入れの食べ物も分けてもらっていたそうで、こんなことならもう少し良かったという話も聞いた。

十 難民収容所

十月三日、旧満鉄社宅群に入れということになった。「助かったな。これで冬を越せる」雄基駅の南方に広く展開した社宅群の南半分と、合宿

と呼ばれる宿泊寮が収容所になり、我が家は河畔にある工夫長屋の一軒に数世帯が詰め込まれた。

本部を合宿に置き、全棟を区分して隣組の戦後版を作る。本町の写真屋さんだった辻氏は元の商店主を各班長に任命した。商店連合会の続きのようなもので、これはうまくいった。コンロ製造業だった足立班、菓子商だった山岸班、酒問屋だった久江班の三班であった。我が家は山岸班となったが、班長は私にロシア文学の話をして拾った本を貸してくれた。成人男子はソ連軍の使役に行くが、山岸班長はよく働いた。駅で貨車に積み込む貨物は、あらゆる種類の戦利品であった。

高梁の臨時配給があったが、砂が混じり品質は最低だった。西町の家から砂取機（洗米機）を取ってこいと言いつしたが、禁足令下で保安隊が巡回しているではないか。「子供なら捕まっても大丈夫だ」とのことで、私が行くこととなった。

私はビクビクしながら町へ出ると、朝鮮人の子供がソ連兵に「ヤボンスキイ、バリテ！（日本人を

撃て）」とせがんでいた。若い兵士が腰に手を当てて私を見た。我が家を占拠していたのは、華僑の范という顔見知りだったが、もちろん歓迎されなかった。砂取機とわらびの漬物を持ち出すのは黙認して、「パリカラ！（とっとと失せろ）」と、長い人差し指を振り立てて追い立てた。結果的にこの計画は成功した。

父は、私を孫氏宅へ使いに出した。それも前後十数回。確かに私は適役だった。邑内の道に詳しい。荷は背負える。しかし、ただの使いで交渉ごとではできない。用件は預けた荷から防寒衣料をもらってくるほかに、粟餅、なめ味噌などの無心であった。早暁七時前に帰れば保安隊も巡回をしていなかった。孫家では必ず朝食を出してくれた。真鍮のどんぶりに山盛りのヒエ飯、明太魚とわかめの塩汁にキムチ。献立はいつも同じ、難民にはご馳走だった。

十一 悪疫流行

收容所生活を始めたとき伝染病を予見した者は

いなかったが、当然に栄養不良、凍死はあり得ると思った。衛生環境が悪く医療を欠けば死亡率は高くなる。十一月から翌年一月にかけて発疹チフスで百十余人が死んだ。五人に一人の割合だ。この病気は虱シラミが媒介する。風邪と似た症状が悪化して十日余りで死ぬ。父もこれにかかり十一月末に死亡し、そのあと家族全員が罹病した。我が家ばかりではない。このころがピークでどこもかしこも病人だらけになったが、中には何ともない幸運な人もいた。

本部は満鉄クラブを臨時病棟にしたが、入院しても死ぬのはやむを得ない、助ければ結構という所でしかなかった。私は発病して担ぎ込まれたことや、何日間寝ていたのかなどは一切覚えていない。奇妙な臨死体験もした。正月過ぎ退院したら、食糧その他をことごとく盗まれていて餓死するしかないピンチに見舞われた。家族は全員病後でぼけていて食事を要求する。私は孫家へ行き中学生の次男に助けてくれと頼むと、粟餅を一斗ば

かりとトウモロコシをくれた。翁に父の死を伝え
ると、げんこつで胸を叩きかなしんでくれた。

亡父の墓は、山岸班長と竹本さんが掘ってくれ
た。野辺送りのあとで家族が倒れている。凍土を
掘る困難さは大変だった。大半の男が発病してい
て掘り手がいない。空腹なうえに防寒具もない。
そのうえ無報酬ときては、みんな尻込みする。下
手したら凍傷にかかるのだ。合宿裏の石炭小屋に
死体を積み上げ、墓掘りの順番を待つ。同級生の
木村君は、小さな妹を連れて毎日こも包みされた
両親に「面会」に行った話を、後日してくれた。
発病した私は石炭小屋を見ていない。その木村君
も、南下時注文津で死亡してしまっただ。

十二 あとの者はどうしたか

鉄橋のたもとの共同墓地を整備した。四辺を玉
石積みして囲み、上を平坦にして円壇を築き、日
の丸の形にした。春の彼岸に法要をして五輪之棟
に刻んだ木柱を建てた。北を正面にして表に「日
本人の墓」両横に「毎時作是念以何令衆生」と

「得入無上道速成就仏身」裏に「昭和二十一年
三月二十一日雄基避難民団建立」と墨書した。

班長会議で「これ以上の犠牲を出すな。再度の
越冬はせずに南下しよう」と決議された。南下経
路は諸説紛々で、三十八度線を往復した朝鮮人の
体験談が報告された。私はまた歩くのかと嫌に
なった。

三月からは外出解禁となり、働ける者は町に出
た。私は西町の生家焼け跡を一番先に訪れた。我
が家は十一月某日深夜に火を出して全焼したの
だった。范が失火の責任を問われて、豚箱入りし
たことを同町内だった国本さんが、人目を忍び教
えに来てくれた。

十三 収容所移転

上本町の山手、緑ヶ丘の元陸軍官舎へ移動命令
が出た。六月の初旬、よく晴れた日に大勢連れ
だつて、雄羅線の鉄道線路をアリののように往復し
て荷を運び終わり、つらい思い出の充満した満鉄
社宅にさようならを言った。空き家になった社宅

に死者が入り、我々を見送っているような気がして何度か振り返った。

元陸軍官舎は赤煉瓦建ての立派なもので生涯最高のものになったが、略奪されて建具などはほとんど役に立たなかった。我が家は松林の丘に建つ中隊長官舎に、山岸一家と竹本氏ら計五世帯十四人と同居した。町に近くなり子供の私も働いた。一、郡庁營繕の手伝い、日当五円。これはピンハネである。二、雄基神社解体の使役、報酬なし。三、農家の日雇いは日当二十円。貨幣は軍票と元の朝銀券が等価通用し十円・五円・一円の小額紙幣は朝銀券を使った。硬貨はない。次兄は同級生と雄基座の清掃員をしていて、ほかの仕事に変わるために私に替わってくれと言う。一級下のO君と行くと採用され、日給五円。ソ連映画「勝利の観兵式」を見る。映写技師が「日本ハ必ず勝ツト標語ダケ。コノ映画見テ反省シナサイ」と我々に言った。

十四 南下発表

十月八日朝八時、官舎下手の丘に集合して南下発表を聞く。辻団長が威興日本人世話会の松村、小西両氏を紹介し、小西氏が「十月中旬、四隻の船で二回に分けて脱出する」と発表して解散となった。両氏がざわめきの中から降りて来ると、吹田さんの遺児兄弟を連れたばあさんが両手を合わせて拝み、小さな兄弟もこれに従った。小西氏はじっと見て「よしよし、苦勞したね。元氣で行くんだよ」と言い、囲んだ人々はボロボロ泣いた。

家族全員で最後の墓参りに行く。多くの遺族と線路を西へたどる。秋色深い白鶴洞。荒野の野菊を供える。秋草にすだく虫の音が「行くんか、行くんか。淋しいぞ」と言っているようだった。

十五 愚かというも哀れ

問題は闇船の運賃であり、大人八百円、子供半額。日雇いで作れる金額ではない。金のある者、ない者様々でいろいろなことを見聞きした。最終

的には日本人世話会が不足分を出したが、それは秘密にされていた。夕食時に母が船賃の件で愚痴ると次兄が「うちには行けないさ!」と言った。母は怒ったが、本当は金があるのに支出を惜しんでいたのだ。金のことは教えるべきだった。のちに佐世保上陸時に所持金を封鎖され、亡父の残した金を失うことになる。

十六 出帆時の編成

第一回 十月十六日出帆

一番船 団長 原口尚一 新聞販売店主

二番船 団長 小松楠重 雄羅木材社長

第二回 十月十九日出帆

三番船 団長 吉田伊蔵 共栄木材社長

四番船 団長 辻 又次 写真館経営

番外船 団長 佐藤惣五郎 阿吾地より合流

私たちは一番船になった。深夜集合、点呼。出発! 本町通りを東へ行く。缶カラを落として音を立てた者が厳しく非難された。右折してから保安隊が付き添った。「なんだ。黙認か」と事態が

分かった。モサボリ河岸に二隻の朝鮮式帆船が待っていた。次兄と右舷後部に座を占める。船倉に女、子供が入り、船はほぼ満員。静かに離岸、湾内は満月に照らされ水銀の盆みだった。引き潮に乗り湾を出ると卯島手前で船頭の号令一下、二人の水夫が帆を張って風をはらませ面舵を取った。左舷は波を切り、右舷がグッとせり上がると悍馬のように走り出した。振り向けば朝日の射す山裾に、雄基の町が小さく見える。さらば雄基よ!

二番船と競争するみたいに快走し、舵柄を押さえる船頭は「夕方、清津イクヨ(通過)」サッポ号は古い木造帆船で約八十トンの沿岸貨物船だった。行く先は江原道の注文津。本部は、予備日を含めて四日分の食糧携行を指示した。我が家では高粱団子三食分、いり豆三升、青リンゴ二十個に塩干しホッケ五尾、それに水十八リットルを用意した。五人の四日分である。

十七 難民乗客

原口班、吉平班を主として山岸班は少ない。合計百三十六人。原口団長は乗船名簿を持っていたと思う。サッポ号には便所はない。甲板に座った者は風下舷に行く。船倉分は小缶に入れて甲板の者に投棄を頼む。出発時音を立てて叱られた缶カが、最も人の役に立ったのだ。

十八 航行状況

二日目から無風が続き漂泊。二番船を見失う。北西風を待つこと幾日か、櫓こぎでは日本海は広過ぎた。四日を過ぎ食糧が尽きる。船頭が風乞いをしたら嵐になり、サッポ号の母港へ避難。北朝鮮の監視船に捕まり取り調べ後、「出発地へ戻れ(放免)」となり助かった。予定の四日間は十日に延びたが、問題の三十八度線は夜間に順風が吹き、無事に突破できた。

十九 無間地獄の無間道

十月二十六日早曉砂浜に上陸。原口団長が「さあ、出発しよう！ 注文津に着いたらライスカ

レーでも注文しようぜ」と言った。五十過ぎても元気だった。防潮堤の上は硬い碎石道で、これに汀と右手の松林がどれも一直線に平行したまま伸びていて先が見えない。歩こうとするが足が前に出ない。休んでばかりいた。母、姉弟は固まり、兄と私はバラバラに歩いた。何日も食べていない胃がゴロゴロするが水もない。小さな女の子を三人も連れた桐原さんは力のある大女だが、さすがに参って「ああ、日本はあまり威張ったからねえ。その罰が当たったんだよね」と、天を仰いで唄うように嘆いた。防潮堤が終わり、米軍前哨パス。丘陵地で視野が開けて鉛色の海と港町が見えた。あれか！ あれだよ。あれが注文津だ！ 十六キロメートルの道を約十二時間もかかったのである。

二十 テント村

砂とバラックの町並みを通過する。日本人収容所は町の南外れにあった。すぐ夜になったがライスカレーどころか何もなし。この失望感で、大げ

さに言うのと死にそうだった。二番船以下次々に到着。三番船は撃たれて船員が負傷した由。このあとは検疫と船待ち。

- ・給食は朝夕二回。コップ一杯のスープだけ。
- ・二日目にDDTの消毒洗礼を受けた。
- ・便所は海岸寄り、赤松林の遥か彼方にあつた。

・雄基の吉田氏がテント村の村長になった。

・私は出帆以来十二日目に飢餓便を一日がかりで排出し、これでまた死ぬ思いをした。

・夜は松林の彼方で灯台が青赤青と美しく発光して、目の洗われる思いがした。

・羅津の野沢氏一家と巡り会った。

・米軍の大きな缶詰が支給され大喜びした。

・十一月三日演芸大会が催された。

・十一月四日午後「おーい、船がきたぞー」

二十一 帰り船

十一月五日朝収容所を出発し、港へ出る錨泊中の元駆逐艦「楨まき」に通船で乗船した。午後出港。

何しろ早い。翌六日夕方佐世保港外仮泊。翌七日朝入港。連合軍の艦船がビッシリ。ランチがはしけを引いて迎えにきた。奥の水路を行くと、畑から紺緋の娘が手を振り喚声をあげて歓迎してくれた。女たちは涙を流し「嬉しいねー」と言っていた。

二十二 援護局の施設

針尾の海兵団跡に入る。我々はもう難民ではなく引揚者になった。朝食はボロボロの飯に乾パンという献立。所持金は没収（封鎖）され、一人当たり十円札で百円宛くれた。予防接種、引揚証明書交付と引揚先までの乗車証給付。旧陸海軍の被服類の支給は一人につき衣類一着、履き物一足であった。乾パンの支給数は引揚先によって異なっていた。

二十三 引揚げ、状況終わり

軍服姿がにわかにあふれ、兵営みたいになった施設には十二日昼迄いた。同日南風崎駅発品川行き引揚列車に乗る。目的の駅で下車した者との

別れを惜しみ、発車する列車に手を振り追ったりしていたが、大阪を過ぎたところからこの情景は減った。品川駅には十五日朝到着。東北本線に乗り換え石橋駅到着が夕方六時ころ。助役が気の毒にといふ顔をしていた。稲葉村まで最後の夜行軍。途中で道を尋ねると、親切な人で案内してくれた。大きな農家に着くと、「お晩でやんす」と私たちの到着を知らせてくれた。亡父に似た男（伯父）が現れ、我々を見定め甲高い声で「これだけか、みつ（亡父）はどうしたえ」「そうか死んだか」と言つて、まるで亡父が追いついてくるのを待つかのように、暗闇の奥を見つめた。

二十四 細く長く、いじましく

この本家には翌年の二月まで厄介になり、隣村へ移る。母の実家の土蔵で鼠ねずみのような暮らしが始まった。私と弟は赤塚国民学校へ一学年足踏の形で転入し、私はすぐ卒業。農村に引き揚げたのは不運だった。現金収入の手段である仕事がなく、生鮮食品の入手も困難だった。農家は小売りをし

ないのだ。二十三年新制中学入学、弟は三年生。一足先に稲葉へ復員した予科練の長兄は、とび職の会社で就職していた。次姉は病院の看護婦になり、次兄は大工見習いになり最も苦勞した。母は衣料品の行商で近在を歩く。働ぎ手の多い割には低収入ばかりで、赤貧洗うが如しの境遇から抜け出せなかった。民政保護を受けたが傘、ふんどし、下駄というような物ばかりしか支給されないので、すぐ辞退した。

私は、中学校を卒業した二十六年春に、海上保安庁補助要員の採用試験を横浜で受けて合格、半年後に第七管区（九州）の巡視船機関科員（雇員）になれた。三十三年本部水路部（東京）へ転勤し、三十六年見合結婚したが、初級公務員では所帯を持つと苦しい。三十七年依願退職し、駒沢大学の設備係に転職した。子供も生まれてよく働いたが、現業員（傭人）の身分では昇任はなく昇級も頭打ち。よそ者を嫌う係長にホサれたのを機会に、入手した宅地の造成から建築までを日曜大

工でやり、十一年目に完成させた。とび職を辞め、建築設計事務所を始めた長兄が褒めた。「仕事は分かれればできるさ」「これで我が戦後は復興したのだ」「生意気言うな」。平成十一（一九九九年）桜花に送られ六十六歳で定年退職。この間に母と長兄は病没した。長姉正子は、終戦時京城（ソウル）で病氣入院中に死亡。私は雄基（現在の先鋒市）と終戦前後の出来事及び引揚げを忘れない。

北朝鮮脱出の記

東京都 佐藤 美子

一 阿吾地での新婚生活

朝鮮咸鏡北道慶興郡阿吾地邑灰岩洞五十番地。これは昭和二十（一九四五）年八月十日までの、朝鮮人造石油株式会社阿吾地工場の所在地であり、そして私たち一家が平和な毎日の生活を営ん

でいた所でもあります。会社では良質の石炭を液化して石油を造っていたようです。阿吾地は、朝鮮、満州、ソ連の三つの国境が近くにあり、京城（ソウル）から二十四時間もかかる山また山の僻地にある酷寒の地です。

京城生まれ京城育ちの私が、阿吾地の佐藤仁の許へ嫁いだのは、昭和十八年三月下旬でした。佐藤が住んでいた社宅は煉瓦造りの二階建て、一棟六軒の長屋風で、広い敷地に同じ造りの建家が何列も整然と並んでいました。北朝鮮の春は遅く、社宅にはまだスチームが通っていて、建家の間にあるスチームのドレンパイプから白い湯煙がもうもうと上がっていた風景が印象的で、私には湯の里というような思い出がありました。

しばらくして映画館近くの二戸建てに移りました。今度の社宅は設備が良く、どの部屋にもスチーム暖房が通っていて、真冬でも浴衣一枚で過ごせるほど温かく、台所はすべて電化され、栓をひねれば熱い湯が出るのはお風呂も同じでした。